

# e ラーニング指向性とグループワーク指向性との関連

## Relationship between e-learning orientation and group work orientation

富永 敦子<sup>\*1</sup>, 高崎 亜希子<sup>\*2</sup>, 向後 千春<sup>\*3</sup>

Atsuko TOMINAGA<sup>\*1</sup>, Akiko TAKASAKI<sup>\*2</sup>, Chiharu KOGO<sup>\*3</sup>

\*1 早稲田大学大学院人間科学研究科

\*2 早稲田大学人間科学部

\*3 早稲田大学人間科学学術院

\*1 Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*2 School of Human Sciences, Waseda University

\*3 Faculty of Human Sciences, Waseda University

Email: a\_tomi\_osuga@asagi.waseda.jp

**あらまし** : eラーニングには、時間や場所を問わず、繰り返し学習できるなどの長所がある反面、学習者が途中でドロップアウトしやすいなどの欠点もある。実際、学習者の中にはeラーニングを好む者もいれば、eラーニングを苦手とする者もいる。どのような学習者がeラーニングに向いているのか、また向いていないのだろうか。本研究では、大学生を対象に、eラーニングに対する指向性を調べるための質問紙を作成し、調査を行った。

**キーワード** : eラーニング, グループワーク, 学習者特性, 尺度

### 1. はじめに

eラーニング白書<sup>(3)</sup>によると、eラーニングの経験者は、eラーニングの長所として、時間や場所を問わず、繰り返し学習できることを挙げている。その一方で、eラーニングの欠点として「受講継続のモチベーションの維持が困難」「講師や他の受講生とのインタラクティブ性が少ないため、研修自体を淡泊に感じる」を上位に挙げている。

このようなeラーニングの欠点を補うには、学習者に対する支援が必要である。しかしながら、学習者にはそれぞれ特性があり、特性にあった支援が必要であると考えられる。

eラーニングの学習者特性に関する研究としては、向後ら、森田らがある。向後ら<sup>(1)</sup>は先延ばし尺度を用い、先延ばし傾向の強い学習者ほど、ドロップアウトしやすいことを明らかにした。森田ら<sup>(2)</sup>は、オンライン学習における学習状況と学習スタイルの関連性を調査し、内省的な学習者が着実に学習を進める傾向にあることを明らかにした。

以上の先行研究から、学習者の特性によって、eラーニングに向いている者と向いていない者がいると考えられる。本研究では、学習者のeラーニングに対する指向性を調べるための質問紙を作成し、調査を行う。また、外的妥当性を調べるために、グループワークとの関連を調べる。

### 2. 方法

#### 2.1 調査対象

私立大学に在籍する大学生 271 人を対象に調査を行った。回答者数は 209 人 (回答率 77.1%) であった。そのうち、未記入がある者、回答に偏りがある者を除外し、160 人 (男子 98 人, 女子 62 人, 平均年齢 19.99 歳,  $SD=1.76$ ) を分析対象とした。

#### 2.2 調査方法

調査は、大学のeラーニングシステムのアンケート機能を使って行った。回答期間は12日間とし、期間内ならば、どこからでも回答可能とした。

#### 2.3 質問項目の作成

同大学で2008年度に開講されたブレンド型授業の授業後アンケート(自由記述)の結果をもとに、eラーニングに対する指向性を問う質問24項目を作成した。回答は、「まったくそう思わない」～「まったくそう思う」の5件法で実施した。また、フェイスシートにはeラーニング、グループワークが好きかどうかの設問を入れ、「大好き」～「大嫌い」の5件法で回答してもらった。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 質問項目の検討

質問項目についてG-P分析およびI-T相関を求めたところ、有意でない項目はなかった。また、全項目でクロンバックの $\alpha$ 係数を計算した結果、 $\alpha = 0.851$ となった。この値は一般的な基準0.8よりも高いので、不良項目はないものとした。

質問項目24項目について因子分析を行った(主因子法, バリマックス回転)。その結果、固有値が1.0以上の基準により7因子を抽出した。次に、負荷量が.40以下の項目を除外し、残りの16項目について再度因子分析を行った(主因子法, バリマックス回転)。その結果、固有値が1.0以上の基準およびスクリープロットの急落から5因子を抽出した。全体に対する5因子の累積寄与率は49.08%であった(表1)。

各因子の下位項目をもとに、因子名を検討した結果、第1因子は「緊張感」、第2因子は「効率性」、第3因子は「直接性」、第4因子は「孤独感」、第5因子は「柔軟性」と命名した。

表 1 探索的因子分析の結果 (バリマックス回転後の負荷量)

	因子 1 緊張感	因子 2 効率性	因子 3 直接性	因子 4 孤独感	因子 5 柔軟性	共通性
e ラーニングだと気が散って先生の話集中できない※	<b>.73</b>	-.27	-.14	-.05	.07	.63
e ラーニングは、授業を受けている気がしない※	<b>.72</b>	-.19	.19	.00	.22	.63
e ラーニングは緊張感がなくなり、だらだらしてしまう※	<b>.60</b>	-.09	.17	-.11	.00	.41
e ラーニングは単調な感じがする※	<b>.60</b>	-.15	.17	-.24	-.03	.47
e ラーニングは臨場感に乏しい※	<b>.49</b>	-.24	.29	-.22	.06	.43
e ラーニングのほうが効率よく学習できる	-.24	<b>.73</b>	-.07	.00	-.28	.68
知識を習得するときは e ラーニングのほうがよい	-.18	<b>.57</b>	-.15	.16	-.01	.41
e ラーニングの授業は物足りない※	.27	<b>-.44</b>	.22	-.13	.17	.36
e ラーニングは対面授業よりも先生に対して親近感がわく	-.08	.29	<b>-.67</b>	.07	-.11	.55
ディスカッションは対面授業のほうがやりやすい※	.19	-.03	<b>.64</b>	-.15	-.12	.48
e ラーニングは、友人に会えないので寂しい※	.12	-.19	.19	<b>-.87</b>	-.06	.84
一人で e ラーニングの授業を受けるのは寂しい※	.36	-.03	.06	<b>-.45</b>	.24	.39
e ラーニングだと自分の都合に合わせて学習できる	-.24	-.07	.06	-.02	<b>-.51</b>	.33
e ラーニングの場合、自分が知っているところは飛ばせるのでよい	.20	.18	-.10	-.01	<b>-.51</b>	.34
e ラーニングは時間や場所に拘束されないとよい	-.11	.21	.03	.09	<b>-.57</b>	.39
累積寄与率	16.51	26.27	34.09	41.79	49.08	

※は逆転項目

表 2 因子別平均と標準偏差

	因子 1 緊張感	因子 2 効率性	因子 3 直接性	因子 4 孤独感	因子 5 柔軟性
EP:e ラーニングが好き (n=44)	-.46(.73) **	.27(.88) *	.03(.78) ns	.16(1.01) ns	-.37(.65) **
EN:どちらでもない・嫌い (n=116)	.18(.88)	-.10(.77)	-.01(.82) ns	-.06(.85) ns	.14(.77)
GP:グループワークが好き (n=81)	.00(.89) ns	-.18(.82) **	.11(.82) +	-.30(.89) **	.02(.82) ns
GN:どちらでもない・嫌い (n=79)	.00(.90) ns	.19(.77)	-.11(.78) +	.31(.81)	-.03(.72) ns

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  +  $p < .10$

### 3.2 グループワーク指向との関連

e ラーニングを「大好き」「好き」と答えた群 (EP 群) と、「どちらでもない」～「大嫌い」と答えた群 (EN 群) の因子得点に差があるかを調べた (表 2)。t 検定の結果、「緊張感」「効率性」「柔軟性」は有意であったが ( $t(158)=4.24, p < .01$ ;  $t(158)=-2.59, p < .05$ ;  $t(158)=3.83, p < .01$ ), 「直接性」「孤独感」は有意でなかった。

以上の結果より、e ラーニングを好む人は、そうでない人よりも e ラーニングの効率性や柔軟性を好み、e ラーニングでも緊張感を失わずに受講できることが示唆された。また、e ラーニングを好きであろうとそうでなかろうと、e ラーニングの直接性の欠如や孤独感に対する捉え方に差はないことも示唆された。常識的には、直接性の欠如や孤独感 e ラーニングの欠点であり、e ラーニングを嫌いな理由だと思われるが、大学生にとってはさほど大きな理由ではないのかもしれない。

一方、グループワークについても、「大好き」「好き」と答えた群 (GP 群) と「どちらでもない」～「大嫌い」と答えた群 (GN 群) で t 検定を行った。その結果、「効率性」「孤独感」が有意 ( $t(158)=2.90, p < .01$ ;  $t(158)=4.55, p < .01$ ), 「直接性」が有意傾向を示した ( $t(158)=-1.75, p < .10$ )。 「緊張感」「柔軟性」は有意でなかった (表 2)。通常、グループワークを好む人は、人との触れあい (直接性) を好み、孤独感を嫌うと考えられる。また、時間がかかるグループ

ワークを好きということは、学習の効率性も重視しないものと考えられる。e ラーニング受講時の緊張感や学習の柔軟性は、グループワークの好き嫌いとは関係がないので、この 2 因子において有意差がなかったのは当然である。したがって、この結果は妥当なものと考えられる。

さらに、e ラーニングもグループワークも好きな群 (EP・GP 群, 23 人)、e ラーニングは好きだがグループワークは嫌いな群 (EP・GN 群, 21 人)、e ラーニングは嫌いだが、グループワークは好きな群 (EN・GP 群, 58 人)、e ラーニングもグループワークも嫌いな群 (EN・GN 群, 58 人) の 4 群で度数の  $\chi^2$  検定を行った結果、有意差はなかった ( $\chi^2(1) = 0.065, ns$ )。したがって、e ラーニング指向とグループワーク指向は独立であると考えられる。

今後は、調査対象者を増やし、本質問紙の有効性について検討する必要がある。

### 参考文献

- (1) 向後千春, 中井あづみ, 野嶋栄一郎: “e ラーニングにおける先延ばし傾向とドロップアウトの関係”: JSET 研究報告集 JSET04-5 pp.39-44 (2004)
- (2) 森田裕介, Koen, B.: “Web ベース PSI コースにおける学習過程と学習スタイルとの関連性に関する分析”: JSET 研究報告集 JSET06-6 pp.77-80 (2006)
- (3) 日本イーラーニングコンソシアム編: “e ラーニング白書 2008/2009 年版”, 東京電機大学出版局, 東京 (2008)